

私はこれまで、様々な職種を通じて介護(ケア)を行ってきた。有料老人ホームの介護職員、訪問介護事業所のヘルパー、サービス提供責任者、管理者、ガイドヘルパー、生活支援員という職種で、高齢者及び障害者の方々と関わらせて頂き、ケアを行ってきた。

印象に残っているケアに触れたいが、その前にそもそも「ケア」とは何か、というテーマに迫りたい。このテーマは、言わずもがな、数多の高名な学者によって定義付けされているが、ここでは敢えて私の考える「ケア」とはどんなものか、説明させて頂きたい。私の考える「ケア」、それは極めて筆舌に尽くし難いものであるのは間違いない。しかし、唯一と言えるのは、それかとても温かいものであるということである。身体的な温かさというより、精神的な温かさである。そして、ケアをする側・される側、双方どちらも精神的に温かくなるのか、「ケア」だと言えよう。さて、私が印象に残っているケアの話に移

りたい。私が印象に残っているケアは、有料老人ホームに勤めていた際、当時、97才だった女性の利用者との思い出だ。その方は、入所した当初は杖歩行ができ、本人の趣味である習字や塗り絵のレクリエーションにいつも楽しそうに参加されていた。また、アイスクリームが大好きで、毎日、15時のおやつの間になると、ハーゲンダッツのアイスクリームを美味しそうに召し上がる方だった。しかし、2年、3年と年が経つにつれ、本人のAカシは目に見えて落ちてきている様子だった。いつの間にか、社交性のある柔らかな笑顔を見られることはほとんどなくなり、自室に籠もることが多くなった。認知機能の低下とともに、レクリエーションへの参加もいつしかしなくなってしまうていた。本人が自身で行っていた排泄も介助が必要となり、リハビリパンツからオムツに変わり、歩行はおろか、立位もままならなくなり、ついには寝たきりになってしまった。大好きだったアイスクリー

ムも自力摂取できないほどに衰弱してしまっていた。私は、ここ数年での彼女の变化と、これまでの思い出を目の前の彼女に重ね合わせ、郷愁に浸るようになっていた。そんなある日だった。季節の変わり目の秋の風の匂いを鼻に感じていた頃、いつものように15時に彼女のおやつであるアイスクリームの食事介助をしに訪室した。冷蔵庫からアイスクリームを取り出し、蓋を開け、スプーンで口元まで運ぼうとした、そのときだった。いつもは嬉しそうに「美味しい」と言いながら召し上がるはずが、この日は違っていた。呼吸が荒く、眉間に皺を寄せている。これはアイスクリームどころではない。介護職3年の経験を積み介護福祉士になっていた私は、直感的にそう思った。即座にナースコールボタンで看護師を呼び、バイタル測定をしてもらった。すると、血圧は最高、最低とも基準値を大きく下回り、熱発こそしていなかつたもののSpO<sub>2</sub>は89%という状態だった。私は、すぐに提

携先のクリニックにこの状況をFAXし、医師に指示を仰いだ。すると、医師からの返信は「すぐにかかりつけ医のいる病院の呼吸器内科を受診してください」というものだった。私はすぐに介護タクシーを手配し、本人のフェイスシート等の利用者情報、生活記録、施設や本人の家族と連携するための会社用携帯等を準備し、手提げに入れ、病院へ向かった。私は、彼女の無事を一心に祈った。どうか、無事に受診し、元気になってほしい。一刻も早く、早く。それだけを願い、病院へ向かった。病院に到着し、車椅子に彼女を移乗すると、着座姿勢の保持ができていることを確認し、車椅子を押し、病院へ入った。そして、受付を済ませ、彼女とともに待合室で呼ばれるのを待っているときだった。彼女はおもむろに私の方へ顔を向けた。そして、満面の笑みを私にプレゼントしてくれたのである。私はそのとき、この笑顔を守るためならどんな苦勞も厭われない、と心の底から思った。それ

くらい、その笑顔は魅力的であり、パロリーに溢れ、華があったのである。そのとき、彼女は何も語らなかつた。ただ、満面の笑みを私に向けてくれただけである。しかし、その笑みこそ私が「ケア」をされた瞬間だったのだと振り返ってみて今、思う。

以上の経験より、私が考える「ケア」とはやはり、介護をする側・される側双方が精神的に温かい気持ちになる行為のことである。その行為は、有形無形を問わず、それが「温かな気持ち」になるものであれば、それは間違いなく「ケア」と言えるものであると私は確信している。事例で紹介した彼女の笑みを私は生涯忘れないだろう。笑顔、笑みの持つ力の大きさを、このときほど感じたことはない。相手を思う心に、言葉はいらない。言葉以上の思いが心に乗り、表情で相手に伝わったとき、言い表すことのできない感動がそこに生まれる。相手をケアしたいと思っ、てする行動によ、つて返、つてくる反応もケアと言える。